

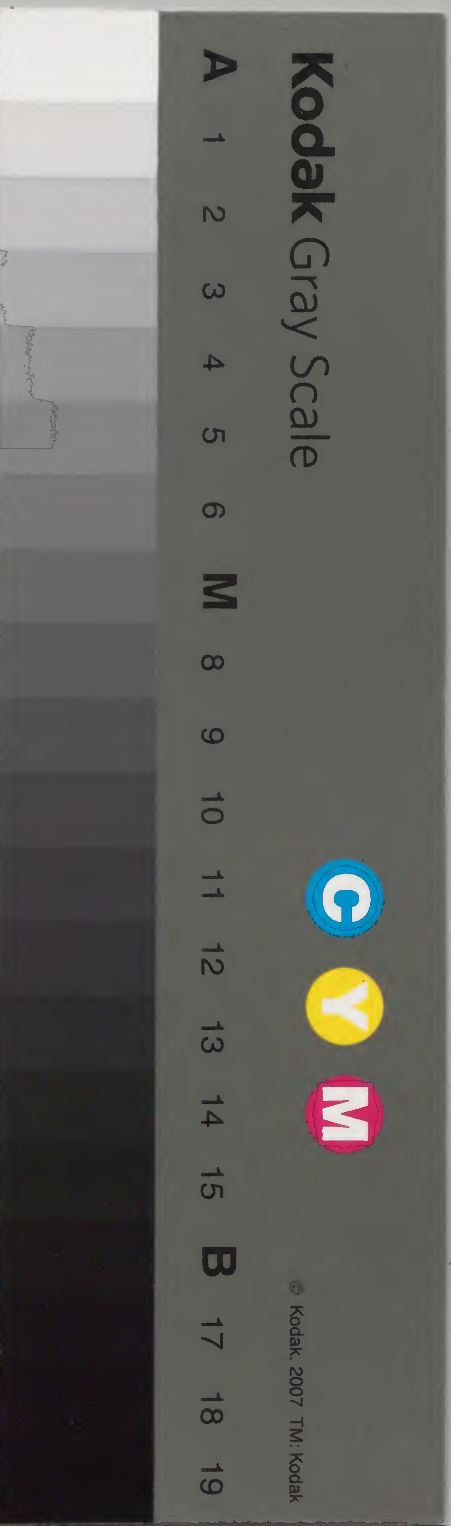
當代記

八

内閣文庫	
番號	和 35041
冊數	20 (8)
函號	150 52

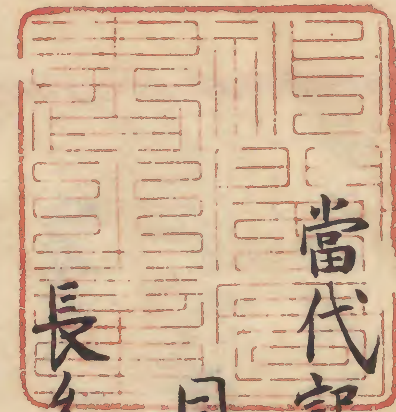
原	文	間	内
一五〇	三三〇	二〇	和
一	四一	冊	書
架	冊	號	類

共廿



肉314

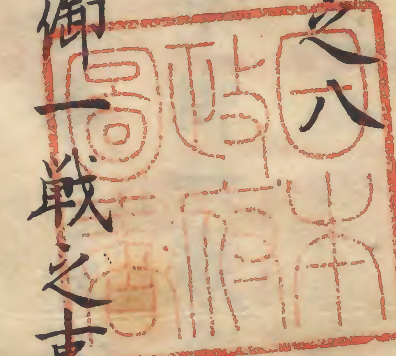
長天半海一輪
雙江一城水落
秀信所信在御
廣田合親
石川信清



當代記卷之八

目錄

長久手御一戰之事



蟹江ノ城攻落給事

秀信卿信雄御和睦之事

真田合戰之事

石川伯耆守反逆之事

家康公秀吉公御和睦之事

家康公初于御参勤之事
秀吉公小田原御退治之事
朝鮮陣之事

夫計謀計謀...
身入于...
自...
當...
...

當代記卷之八

長久手御一戰之史

家康公ハ數年信長公合体ノ旧好思召軍

勝負ヲ不省今度信雄ノ急難救ハントテ五ヶ

國勢ヲ催サレ北條氏直婿ナレハ援兵可有処却

家康公出給ハ駿河押入ト謀ルコソ愚ナレ

依之押入爲沼津ニ松平周防守長窪ニ牧

野右馬允光國寺ニ天野三郎兵衛ヲキ

玉ヲ甲列モ心許ナク思召鳥居彦右衛門
平岩主計頭ニ六川家ヲ添テ残シ置ル信
列ニハ景勝手當トシテ大久保七郎右衛
門ニ信列ノ城ヲ添テ指向テル、五ヶ國
ノ城々ニ留主居ヲ置玉ハ御供一丁騎
ニハ不足三月上清洲ニ至リ尾張ノ國中
ヲ打廻リ清洲ノ城ニ入玉ヲ

一池田勝入森庄藏牒シ合セ小牧山ヲ乘取

シト近边ヲ放火シ大山ハ入庄藏尾藤甚
右衛門羽黒ニ陣取有リシカ十六日酒井
左衛門打廻リニ出テ見スニ夜明方ニ
松平紀伊守家信奥平美作守信昌本多豊
後守康重松平主殿介家忠相掛テ切崩ス
池田父子此由ヲ聞テ二ノ目ノ軍ヲ待テ
壇上ハ引アクル処ニ家康公信雄卿其様
子ヲ察シテ小牧ハ勢ヲ入玉ハ勝入モ

手ヲ失ヒ勢ヲ入ル庄藏ハ五百余騎討レ
金山へ北入ケル
一同廿一日秀吉公大坂ヲ立廿七日大山ノ
城ニ入玉ハ池田勝入申ケルハ小牧ノ
勢日ヲ追テ重リ候ハ三列ニハ曾テ人
數有ヘカラス三易ヘ乱入在ケヲ放火ス
ルニ於テハ小牧ノ勢敗軍スヘシト云ニ
秀吉モ尤ト思召三好孫七郎秀次大將ト

シ堀久太郎五千騎卯月九日三列發向ノ
催シ八日ヨリ廻文アリ此肯家康公ヘ告
来ル者アレハ則賞ヲ賜リ水野宗兵衛榊
原小平太大湏賀五郎允衛門本多豊後丹
羽勘介是部内膳大久保相模ヲ召レ敵ノ
跡ヲ追テ何方ニテモ行逢次第勝負ニハ
不構軍ヲ始ムヘシト仰合ラレ三千余騎
今日未ノ刻ヨリ旌ヲシホリテ打立ケル

家康公ハ井伊万千代ヲ召連ラレ急カセ
玉ハ八程ナク小幡ニ着遠見十人戌ノ刻
ヨリ出シ置玉ハ八馳来テ勝入亥ノ刻ニ
打立南ヲ指テ推行候ト申シカハ兩將ハ
丑ノ刻ニ出テ猪ノ腰原ノ辰巳ノ山ニ着
陣シ夜ノ明ルヲ待玉ヲ然ル処ニ丹羽勘
介カ岩崎ノ城ヲ勝入取巻平攻ニシテ乘
破リ城代丹羽次郎助武勇不撓トイハ共

大勢ニ不及カシテ三百余騎トモニ討レ
ケル勝入首實檢シ機嫌ニテ在シ処ハ落
武者五騎三騎見ハケレハ堀久太郎物頭
ヲ呼テ小牧ノ味方敗軍ト見ハタルノ敵
唯今味方ヲ追テ可来十間ヨリ外ナラハ
鉄炮放スハカラスト云渡シ待ツ処ニ案
ノ如三好秀次ハ柳原小平太康政本多豊
後守康重水野忠重大須賀康高丹羽勘介

氏次岡部弥次郎長盛等ト戦ヒ終ニ討負
千騎計追立ラレ北ルヲ三川勢モ追ヌカ
ツテ進シカ堀カ堅備ヲ見テ流石駈リモ
ヤス又引取更大切ナレハ暫扣テ有シ処
ニ久太郎再拜ヲ取テ下知シ鉄炮ヲ打立
岡部ヲ揚テ一度ニ噓ト突^突テ掛ル柳原ノ
先手勝ニ乗シテハハヲニ駈来ル更ナレ
ハ一支モナク敗軍シ一里計追討ニ二百

八十討レニケル家康公信雄卿モ兵ヲ發
シテ長久手ニ来リ玉ヲ爰ニ井伊万千代
彼是諸剛兵三千余騎ヲ鉄炮ノ者六百先
ヲ張テ扣タリ堀カ先陣又是ニ避易シ追
止テ備ヲ立直サントスレ共備ニハヲニ
騷動シ一揆勢ノ如ク下知モ不聞森武藏
守大音屯ヲアケテ下知スレ共聞入ル人
モナク備ノ足本不定カ、リケル処ニ方子

代下知シテ鉄炮ヲ段々ニ打立ヨリ射力
ケカハルく玉ヲツキ少モ取乱サス見ハ
ル処ニ武藏守カ眉間ヲ射ラレ馬ヨリ落
ケレハ味方ハ是ニ勇ニ敵ハ是ニ氣ヲ失
ヒ進ミ兼テソ見ハニケル勝入ハ左モ右
モ旌色悪キヲ見テ右ノ手ヲ強クセヨト
怒レ共センカタナキ処ニ家康公金ノ扇
ノ御馬驗ヲ嶺ノ脇ヨリ押立玉ハハ扱ハ

徳川殿掛リ玉フト敵見驚キ後口足ヲ踏
初シカ雜兵裏崩シ弥勝入カ旗本落ク寸^外
ル処ニ平松金次郎鳥居新太郎同四郎左
衛門蜂屋七兵衛成瀬小吉渡边半藏等鎗
ヲ合テ首ヲ取ル内藤四郎左衛門高木主
水御馬廻リニ有テ下知ヲナス安藤彦兵
衛勝入ヲ鎗付シヲ永井右近介表テ首ヲ
取ル池田紀伊守ヲハ安藤彦兵衛取忒武

藏守ヲハ本多八藏首ヲ取遁行敵ヲ追諾
ハ半里計ノ其内ニ二千余人ヲ討取ケ
リ秀吉此敗軍ヲ聞テ乐田ヨリ龍泉寺ハ
駈出ラレケレ共兩將ハヤ小幡ノ城ニ引
入玉ハ秀吉為ニ方ナク乐田ノ本陣ニ
折入ラレケル

一 酒井元衛門尉石川伯耆守信雄ノ諸將ト
小牧ニ残テ有ケルカ秀吉龍泉寺ハ出テ

本陣ニ人ナキ更テ察シ酒井元衛門人數
ヲ押寄ニ重堀ヲ押破リ陣屋ヲ焼拂ニ於
テハ長久手表ノ敵敗軍有ヘシ伯耆守モ
早々旗ヲ寄テレヨト三度迄申遣シケレ
共一圓同心ナケレハ酒井齒カミヲシテ
腹ヲ立ケリ

一 太閤五万余ヲ率シ長久手ハ駈向ヒ玉フ
時本多平八石川長門守松平上野介ハ小

牧ノ陣ニ有シカ秀吉長久手へ向ト見テ
秀吉ノ陣場ヨリ五六町先ヲ終五百騎計
ニテ少モ臆セス長久手へ押通り家康公
ノ御供仕小牧へ立飯ル此体ヲ太閤御覽
シ一騎當千ノ兵トハ是等ナルへシテ誓給
フト云々
一秀吉卿ハ赤田ニ飯リ二重堀廻シ用心密
ク今一度合戦セント諸手へ觸ラル、処

小牧ヨリ兩將一万八千ヲ十六年ニ分テ
酒井左衛門井伊兵部先トシテ段々ニ二
重堀ノ前へクリ出し一戦セント見へケ
ル二重堀ニハ堀久太郎蒲生忠三郎長谷
川藤五郎一万計ニテ堅メケレハ胴勢ヲ
誥ラレヨト使櫛ノ齒ヲ引カ如シ秀吉卿
ノ仰ニハ此方ヨリ掛出へカラス敵掛ラ
ハ成程ヲリシイテコタへヨト申サセ給

ヒ碁ヲ打テ御座シケルニ二重堀ノ内色
メクヲ小牧勢見テ合戦セシト勇メトモ
家康公押留玉ヒ一時計守リ居ケレハ日
モ早午ノ刻サカリ也引取候ハト御下知
有テ小牧山ハ引上ケタリ其後御和睦調
ヒ太閤三韓征伐ノ時築紫ノ名護屋ニテ
半年計毎度御評定アリケル次ニ秀吉
公此度ヲ語り出シ何トシテ二重堀ノ人

數ヲ追拂ハレサルト同玉ハ家康公御
返答ニ胴勢ヲ寄ラレテハ合戦ヲ始メテ
勝利ヲ得ツヘシ胴勢寄ラレサルニ依テ
先手勇共達テ制シ引退候ト仰ケレハ太
閤手ヲ打テ感シ我モ其通也ニ重堀ノ勢
ヲワサト不出餌兵ニシテ是ヲトラント
シ其方ノ大勢備ヲ乱シテ駈来ラハ掛ッテ
一騎モヤルニシキト思ヒケルカ扱ハ一

理ナリト宣ヒケレハ聞人感シ奉ル

一五月朔日秀吉濃列ニ退キ大垣ニ入

蟹江之城攻落シ給吏

一滝川ハ勢洲五郡長嶋ノ城主夕リ去年柴
田亡テ後ハ總々^{カニ}五千石ニ成テ江列ニ有
シ力又今度秀吉信雄卿鉾楯アルニ依テ
勢列木造ノ城ハ瀧川ト富田平丸衛門在
番也滝川思フ様蟹江ノ城ヲ調略シテ中

入シ申入シ是ヨリ尾列ニ入テ家康ナト
ヲ劫サント謀テ前田与十郎方ハ此度秀
吉ハ忠義アラハ恩賜ノ地可有ト潜ニ申
遣シケル則同心シケレハ九鬼右馬允ニ
モ此旨告シラセ都合三千大船ニ乗テ六
月十六日ノ夜蟹江ノ城ハ入ル処ニ不慮
ニ城中ノ小屋失火アリ其折節家康卿清
洲ニ御座シ此旨聞玉ヒ治定前田与十郎

逆心シテ敵ヲ引入ルト見ヘタリ少モ足
ヲタメサセテハ悪カリナント御出馬
レハ井伊兵部成瀬小吉計別御供也追々
ニ跡ヨリ掛着濱手ヲ乘廻シ玉ヘ八九鬼カ
跡舟ノ間ヲ押切城ヘ入ルモ不成沖ニ浮
テ有レテ岡部内膳津島ヨリ掛リ九鬼長
兵衛ヲ生捕テ舟ヲ磯边ヘ揚立ス家康公
ノ胴勢モ信雄卿モ駈付息ヲモツカセス

攻玉ヘハ滝川不叶シテ扱ヲカケタリ家
康サテハ前田与十郎ヲ切テ出シ其身ハ
以来味方タルヘキ由起請ヲ書城ヲ用候
ハ、命ヲ助ケント仰ラレケル此條々難
義ノ支ナレハ如何ト思ヘ共城ヲ可持便
モナク又秀吉大軍ニテ大垣ニ居給ヘ共
長久手ノ手ヨリニテ我ヲ見捨ラレケル
上ハ無是非ト思定メ前田ヲ討起請文ヲ

調へ七月二日舟ニ乗テ神戸へ飯リ木造
ノ城へ入ントス富田平左衛門云ヤウハ
前田与十郎ヲ討起請文書城ヲ渡サレ、
上ハ如何様ノ堅約有シモ不知此城へ最
前ノ如ク入ル事不可成ト申ニ依テ天ニ
モツカス地ニモアラヌ境界ト成テ面目
ナク哉思ケシ後ハ子息ニ渡シ洛陽妙心
寺ニ入函閑ノ躰ニテ送り後ハ越前五分

一ト云所ニテ終リニケリ
一秀吉卿大軍ヲ起シ数月對陣シ池田父子
森武藏守ヲ討レ其終勢ヲ打入ナハ味方
勢ニ弱ニ付テ敵其弊ニ乘更アラシト思
ヒ八月十六日濃列ヲ出加賀野江竹力鼻
兩城ヲ攻落シ其勢ヒニ引拂ヒ勢列ニカ
カリ城々ノ制法ヲ定九月下旬大坂ニ打
入玉ヲ家康公其様子ヲ聞玉ヒ秀吉美濃

ヲ立玉ハハ伊勢ヨリ勢ヲ廻ス吏モ哉ア
ラント思召シ衆名ヲ越四日市ニ御陣ヲ
居ラレ秀吉人数ヲ打入リヌレハ松カ嶋
ハ服部半藏ヲ加勢ニ入ラレ白子ハ出玉
ヒ濱田ト四日市ニ城郭ヲ構ハ勢ヲ入置
十月中旬置崎ハ飯ヲセ給フ

秀吉卿信雄卿和睦之吏

一十一月六日秀吉又勢列ハ出張シ玉ハハ

家康公九日清洲ニテ御出馬ナサル、処
ニ同十一日信雄秀吉和ヲ議シテ町屋川
ニ於テ相會アレハ十六日石川數正ヲ御
使トシテ其和睦ヲ賀シ給フ

一家康公十六日置崎ニ飯リ廿一日濱松ニ
飯リ玉フ此日秀吉ノ使来テ和ヲセント
欲ス家康公御返吏ニ信雄卿頼申サレ、
故手キレハ致候ハ信雄サハ和睦ノ上ハ

我ニ於テ子細ナシト云々又秀吉ノ使羽
砦^味下総守^末奉テ然ラハ別テ申合セシ為ナ
レト御息ヲ養子ニ致サレト云々信雄卿
ノ御扱トシテ土方勘兵衛ヲ以家康公ノ
二男御義丸後越前秀康并家老本多作左
衛門一男仙千代石川伯耆守カ一男勝子
代人質トシテ上洛ス于時天正十二年也
各伯耆守供奉ス

一廿四日信雄濱松ニ来テ今度ノ援兵ヲ禮
ヲ謝ス

一廿五日越中ノ佐々内藏介濱松ニ来リ秀
吉我ヲ攻ント欲ス其故ヲ不知願クハ發
兵テ討玉ヘト云々家康公ノ曰我全ク天
下ヲ争ニアラス信雄ノ卿ニ頼レ兵ヲ
棄スレ共和睦ノ上我モ共ニ和睦也ト云
云佐々詞ナクシテ飯ル也

一天正十三年正月ヨリ七月ニ至テ甲信駿
ノ制法ヲ定テル、

真田合戦之吏

一八月氏直ヨリ使ヲ以去々年甲列ニ於テ
和睦ノ時此方ノ佐久郡内ヲ渡シテ家康
卿ヨリハ上列沼田ヲ渡サレハキ由契約
ナレ共今ニ不被渡ト云ニ是ニ依テ家康
公ヨリ以使真田安房守方ハ沼田ヲ氏直

可渡ト云ニ真田カ曰沼田ハ兩將ヨリ不
給私ノ武勇ヲ以討取所ナレハ渡スヘカ
ラス其上今度忠功ヲ盡トイヘ共賞ナク
却テ沼田差上ヘキノ由更ニ不心得ト云
テ大坂ヘ以使者秀吉ニ属セシト欲ス秀
吉大悦シテ越後ノ景勝援兵アルヘキト
云ニ依之同月真田退治トシテ大久保七
郎右衛門鳥居彦右衛門平岩七之助柴田

七九郎保科彈正芦田下条知久遠山大草
諏訪親部祝固部次郎右衛門三枝松平右衛
門矢代越中等七千余騎因八月二日上田
ノ城ハ押寄作毛ヲ薙キ在々ヲ放火スレ
共輕率モ不出城中弱々ト見ヘケレハ寄
手侮テ二ノ丸迄乱入時真田父子千余騎
ヲ卒シ突テ出ル兼テ手立ニ鄉民ニ紙旗
ヲサ、也鉄炮ノ者少々加テ四方ノ谷々

ニ伏セ置キ城中ノ関声ヲ相圖トシテ谷
々ノ伏兵一度ニ関声ヲ合セケル寄手是
ニ驚キ如何様後詰モ有カト思ヒ敗北ス
平岩大久保等踏留テ足輕ヲ集メ本多主
水尾崎左衛門兄弟ハ下知シテ靜ニ引退
トイハ共真田手強ク追付ケレハ步兵揉
立テレ敗シ又ルヲ尾崎兄弟引返シ戦死
ス鳥井力勢ハ一段高キ処ヲ退ケルカ戸

石ノ城ヨリ出テ付ルニ依テ見モ危ク見
上ケレハ小見孫七郎取テ返シ暫ク突合
退クシ部藤吉本多主水ハ弓畔柳孫左衛
門ハ鉄炮ヲ以敵ト揉合城際ヨリ加賀川
迄四五町退ク内ニ究竟ノ兵三百余戦死
ス大久保忠世金ノ上羽ノ蝶ノ差物ニテ
乘廻シ敗軍ノ味方ヲ招クトイハ共皆シ
ラス顔ニテ引退処ニ大久保平介ハ差物

ヲ見テ掛付旗ヲ河原ニ押立味方ヲ待処
ニ敵十四五騎馳来リ中ニモ黒糸威ノ鎧
武者真先ニ進シテ突テ掛リシヲ則突伏
首ハ不取後來ノ敵ヲ待処ニ味方松平七
郎右衛門足立善次郎木下隼人馳来ル是
ニ續テ太田源藏松平引^{井弥}四郎天野小八郎
十塚久助後藤宗平氣多甚六郎江坂茂介
天野喜三郎等馳集リ百騎討高地ハ押立

ル真田カ旌本ト弓杖十六七間ノ内敵味
方ニテミ合鎗ヲ入ント欲ス然ル処ニ武
者一騎味方ノ備ノ前ヲ通りケルヲ平介
見テ水巻ヲセテ通ルハ敵也突ト云ケレ
バ日置五郎左衛門ト名乗駈通ル処ヲ大
河内善次郎走り掛テ突ケルカ鞍輪ニ中
リケレハ日置駈通り振返シテ云ヤウハ
川中嶋ノ加勢ト思敵ノ中ヲ通り突レタ

リト云真田ハ城へモ不引入川ヲ前ニ當
備タリ味方モ少々集リケレハ大久保平
岩カ備へ引テ其方ノ人数後詰アラハ敵
ノ勢不集内ニ合戦可遂ト云々平岩カ曰
勢小勢ニテ強ク働クハ必定近所ニ加
勢アリト見ヘタリ不可然ト云鳥居保科
カ備ヲス、メケレ共是モ同心ナキニ依
テ不及力然ハ真田モ城へ引味方モ引取

ケル今度ノ合戦ニ酒井与九郎一人討取
テ飯ルコレヲクヅレク千ノ高名トコソ
イフ

一同廿日九子ノ城へ働キ築テ川ヲ越八重
原へ押上ル処ニ真田海野ノ所へ押出シ
八重原ノ下ヲ一騎打ニ手白塚ニテ働ク
大久保柴田七九郎ヲ以鳥居ト平岩カ方
へ兩人ノ勢ヲ築テ川端へ押出シ給ハ

吾ト是部次郎右衛門余田源七郎諏訪ヲ
一手ニ合セ真田ガ中ヲ取切弥津原へ追
上可討取ト云へ共兩人更ニ不進大久保
ハ丸子へモ不働八重原ニ陣シ敵ノ透間
ヲ窺処ニ真田昌之同伊豆守信之押出シ
對陣シ互ニ足輕ヲ以駈引位^位ヲ見ル大久
保又鳥居平岩カ方へ使ヲ以真田足場へ
出張シ是部ト戦フコソ幸ナレ兩人我備

場迄出ラレヨ我、毘部カ跡ヲツメ入替テ
可戦ト云遣シケルニモ曾テ不同此ノ間
谷ノ内、毘部ト真田相戦討ツ討レツ終ニ
真田討負テ引退ク其時大久保柴田兩人
ノ勢討成トモ誥寄テ居タラハ真田父子
一人ハ可討取処ニ長詮議ノ内時刻移テ
後悔ス家康公ヨリ毘部ニ感狀ヲ賜フ并
与力同心ノ侍余田主膳大塚兵右衛門取

藤内内藤平内植柘弥藏小鹿又五郎三浦
次助新藤板山波是八人或ハ一番鎗二番
鎗或ハ鎗下ノ高名ソレクニ別テ感狀ヲ
賜フ兵衛門ハ先年味方原ニ於テ枚原十
度兵衛ヲ討先ル者カト仰ラレテ毘部承
テ御誼意ノ通味方が原御一戦ノ砌リ此
兵右衛門申ケルハ今度濱松勢ノ内三人
唐ノ頭掛テ每度魁兵トシテ走り廻ル武

士アリ如何様物頭ナルラン侍ノ戰場ニ
出テ尋常ノ高名ハ不珍軍始リ十八余ノ
敵ニ八目ヲ不掛唐ノ頭掛タル武士一人
可討取ト諸人聞所ニテ過言申ケルカ其
詞ニ不違味方カ原ノ乱軍ニ終ニ彼十度
兵衛ヲ討取唐ノ頭ヲ添テ拙者弟治部少
輔ニ見セ申候其後此由勝頼モ聞唐ノ頭
終ニ見ザル程ニ可見ト有テ取寄唐ノ頭

一 勝頼手前ニ留置レ大塚ニハ感狀ヲ与ヘ
テレケルト御披露仕ル

一 真田度々打廻リニ出ルトイハ共味方勞
レテ不出合此由ヲ家康公聞玉ヒ諸勢引
取シ為ニ井伊兵部松平固防守等五千余
騎ニテ遣ハサル、兩將ハ是非合戦ヲ遂
テ以前ノ耻ヲ可雪ト思ヒシカ共味方ノ
勞兵ヲ哉見知ケシ又景勝カ援兵ヲ哉氣

遣ケシ廿日計對陣シ真田押ヘトシ小室
ニ大久保七郎右衛門一組ノ勢ヲ残シ信
列勢ニハ保科諏訪大草知久下条等我館
々ニ留置キ真田不出ヤウニ守ラシメ敵
ノ二増倍ノ大軍ヲ以何ノ一行モナク兵
一部モ早々引取ケル

石川伯耆守反逆之吏

一太閤御和睦相濟トイヘ共家康卿ヲ大敵

ト思召家臣ヘ不殘金銀ヲ給リ大祿ヲ与
ヘラルヘキ由内通アリ此由我セクト家
康卿ヘ言上スル処ニ石川伯耆守數正何
トカシタリケシ御披露延引ニ及ケレハ
人々不審ヲ立去ル小牧陣中ヨリ秀吉ト
密通スナト、風説頻ナレ共家康卿ハ普
代ノ家臣争カ逆心アラシヤト思召御座
トイヘ共内外ノ諸士互ニ心ヲ置キ騒動

ス伯耆守止度ヲ得ス天正十三年妻子ヲ
引連置崎ノ城ヲ遁上方へ出奔シ家康
卿ト秀吉公不和ノ聞へアツテ軍勢濱松
ニ馳集ル依之家康卿岡崎ニ移リ玉七制
法等ヲ定ラレ大久保七郎右衛門ヲ呼ニ
遣サル、七郎右衛門諸士ニ向テ此節ヲ
得テ景勝奈向アルヘシ信玄ノ子勝童ヲ
取立甲列へ討入シトノ雜説アリ又ハ一

揆モ可起真田ハ眼前ノ吏也此上ハ秀吉
ヲ敵ニウケテハ始終難叶此城ヲ捨ル吏
ナカレト云テ究竟ノ兵残ス此城ノ留守
ハ莫大ノ忠切ナレハ勸賞ハ某可計ト云ミ
大久保一族ノ内誰ノ家ハ石川カ宅ニ近
シ妻子ノ安否ヲ不聞依之一族ノ内誰可
残ト云々者ナシ然シテ弟ノ平介ニ對シ
テ汝可残ト云々平介カ曰所領ニ耽リ残

ルニハアラス為主君兄ノ仰也依義一命
ヲ捨捨シト云々七郎右衛門モ別レテ惜
涙ヲ催シ是崎ニ馳着ハ平介ハ跡ニ残り
諸宰相共ニ翌年ノ二月ニテ堅固ニ相守
ル処ニ景勝モ不出野ノ口ヲノカレテ在
番ヲ渡シテ飯イ川ハ大坂へ行ヌレ共
サセル勸賞モ十ク年經テ後関東御入國
ノ砌秀吉公ノ御意ヲ以家康公へ歸參仕リ

信列松本ヲ賜ル

一本多作左衛門ハ無二ノ忠義ヲ知セ奉シ
為ニ秀吉ヲタハカリ人質仙千代ヲ病氣
ト号シ盗ミ出シ三易へ引取家康公御感
不斜
一上方ニモ合戦ノ評議有テ更己ニ急々
ル由三易へ聞へケレハ本多作左衛門ヲ
召テ三易置崎ノ城ハ上方ヨリノ手先弟

一ノ因城也秀吉近日攻下ルノ条此城ニ
テ防戦ニ軍功ヲ励スヘシト仰下サレ敷
百騎ノ勢ヲ付テレテ置崎ノ城ヲ賜ル抑
置崎ノ城ハ得川家御先祖ヨリ代々ノ御
弓立所也然ルヲ下シ給ルノ条弓矢ノ面
目何事カ如之乎ト感悦無限然則秀吉ノ
大吏ニ馳向テ骨屍ヲ軍門ニ曝サント思
七切タル気色寔ニ顔面ニ顯ル仍テ家康

公大キニ御感有テ則御感狀ヲ下シ賜ル
此度ノ合戦ニ作左衛門介ヲ介ラシテ吏ハ
万ニ一ツモ十キ吏也サレハ後代ノ為ト
テ知行同身ニ至ル迄家ニ傳ヘントノ御
感狀一男仙千代元服ナシテ本多丹下ト
書テ賜ル

秀吉公家康公御和睦之吏

一尾張信雄ノ御扱ニ兎角上洛御尤成ヘシ

一若上洛十千ニ於ハ秀康ヲ生害シ鉾楯ニ
ナラント達テ御異見アレハ家康公ノ仰
ニ秀康ハ養子ニ遣シ候上ハ少モ構ナシ
上洛ノ義覺悟ニ不及ト云々太閤此由ヲ
聞玉ヒ又下総守勝雅未テ御上洛ノ義ヲ
イサメ奉ル家康公ノ仰ニ何ソノ洛ニ趣
秀吉ノ家風ニ随ニ哉ト宣フ勝雅翌日罷
出ケレハ家康公ノ仰ニ汝未夕不飯哉ト

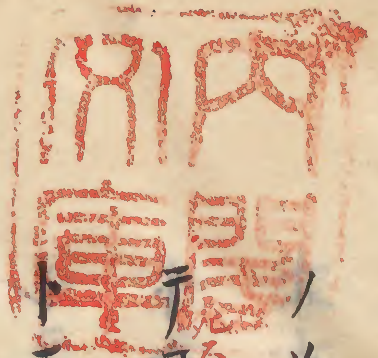
云々勝雅曰貴公ノ御為メニ申テ見ン今
使再三ニ及ヒ登リ不給ハ秀吉大キニ怒
テ大軍ヲ発シ更ニ必定也當処へ来テ見レ
ハ要害未夕不修城壘慥ナラスレテ貴公
朝暮鷹野ヲ好シ玉フ不亦危哉貴公是ヲ
察シ給ヘ仰ニ曰汝力命危ルヘシ重テ未
ル更ナカレト命セラル、下総守是非ナ
ク罷飯大坂ノ城ニ登リテ詳ニ言之秀吉

是ヲ曾テ不怒家康カ云処尤然リ今天下
ノ諸大名家康ヲ目當トシテ見合スル折
カテ也家康ト手切ニ於テハ関東ヨリ奥
列サテ家康ニ与カシテ天下ノ乱ト成ヘ
シ又家康上洛セサレハ天下治ニリタル
ニハアラスト思ヒ煩ヒ純帳ノ内ニ入リ
テ一日一夜枕ヲ傾ケラレ早朝アラ、カ
ニ起上リ家康ヲ上洛セサセタリ日出夕

シ誰カアルト宣ヘハ堀尾生駒驚テ罷リ
出ル勝雅モ召レ信雄ノ卿モ招レテ城ニ
来ル太閤ノ仰ニ兩日飲食モ絶テ工夫シ
テ見ルニ家康若輩ノ時ヨリ粉骨ヲ盡シ
五ノ國切取支配ス不足ナキ分限也亦乱
世打續テ自佗共困窮ノ時分ナリ信長大
形ニ打治メ玉ヒシ其跡ヲ我々悉ク五畿
内中国北国打ナヒケル其鋒先家康戦ヲ

以勝利ヲ得ントハ思フヘカラス只今シ
大吏ニ思ヒ恐テ上洛セサル処也妹聲ニ
シテ妹ヲ毘崎へ人質ニ遣シテハ聲入ト
シテ家康上洛スヘシ家康上洛スルニ於
テ天下ノ諸大名時日ヲ不移上洛シ天下
太平ナラシト宣ヒケル兩人畏テ誠ニ善
キ御思案ニテ候乍去其御妹子ハ如何ト
申ケレハ太閤ノ仰ニ依治日向守カ妻ニ

幸子モナケレハ是ヲ取返シテ遣スヘシ
此妹ヲ返給ハ子ハ天下不治返シ給ハレ
ハ天下治ル道アリ天下ノ為ナル程ニ偏
ニ頼入ト云ナラハ依治ハ勘辨厚キ人ナ
レハ無相違返スヘシ其通罷越テ談セヨ
ト宣フ兩人罷越テ件ノ趣申達ス依治承
リ畏入候女共ヲ指殺シ自殺スルハ正夫
ノ自害ナルヘシ天下ノ為ニト仰テ凡ハ



上ハ召連テレヨ乍去我等美生テハ天下
 ノ為悪カルヘシトテ腹十文字ニ力キ切
 テアツハレ武士ノ器量哉ト皆感心セズ
 ト云吏ナシ
 一信雄ノ使置崎ニ来ル秀吉ヨリ亦下総守
 モ来テ太閤ノ妹ヲ置崎ニ入奉リ候ハハ
 上洛アレトノ御吏也御返吏ニ辱存候若
 然ラハ押付上洛可申ト宣ヘハ下総守悦

テ罷飯秀吉喜悅不斜使置崎ニ来ル因崎
 ヲリ榊原式部太輔康政嘉儀ノ御使トシ
 テ上洛シ富田丸近カ宅ニ入御馳走不斜
 秀吉公丸近カ宅ニ入テ仰ニ曰我康政ニ
 逢シ吏頻リニテ登城ヲ不待爰ニ来ル先
 年長久手ノ陣中ニ於康政カ曰秀吉不知
 主恩信雄ニ弓ヲ引吏其惡逆誰カ是ヲ憎
 甘ラシヤ然ルニ今多秀吉ニ与ス者アリ

同前ノ禽獸也ト云レ其節怒氣胸ニ不
絶康政ヲ殺シ来ル更アラハ恩賞若ク
其望次第タルヘシト云レ今家康卿ト親
ク成テ康政ニ相逢則其遺恨忽散ス康政
力忠義ノ厚キ更我尤感ス今日リ後諸更
相議セシノレ康政敬テ拜辞ス明日登城
太閤御懇情不踈シテ畀崎ニ飯ルサレト
モ家老一同ニ先御上洛ノ美御遠慮アラ

レ候ヘ若政所ナト御同道ナラハ可然ト
云レ仰ニ曰妹ヲ捨テ腹ヲ切ラスル程ノ
不美アラハ不及是非天命ニアリト宜ヒ
ケル処ニ又秀吉使ヲ以三筋ノ家老トモ
氣遣ニ存ル処ニ尤也其望ニ任セ母ニテ
候人ヲ畀崎ヘ参セシト申来ル家康公ノ
御返更ニソレニテモ不及忝キ御更也

ト云レ

家康公初テ御参勤之吏

一大和太納言秀長再三申上ル条恐至極ニ
ハ候一共政所ヲ敵方一御渡シ候吏如何
御思案ナサレ替ラレヨト云々太閤仰ニ
家康上洛スル吏鏡ニウツルカ如シ可心
案^易卜宜ニ終ニ翌十四年五月十四日秀吉
ノ御妹政所御同道ニテ濱松ニ御輿入ス
レハ諸人大息ツヒテ喜吏限ナシ十月廿

六日御上洛有ケル時兵部ト七郎右衛門
ヲ召テ若我腹ヲ切タリ共女共ヲハ命ヲ
助テ飯スヘシ政所ハ指殺スヘシト被仰
付ケル扱上洛ナサレ美濃守秀長カ亭ニ
入玉ヘハ秀吉公其俣来臨有テ家康公ノ
御手ヲ取長途ノ辛苦ヲ射^謝シ玉ヲ秀長ヲ
以御馳走善盡美盡御供ニハ本多中務柙
原式部阿部伊与永井右近鳥居元京亮西

尾隠波守牧野讚岐守其外一騎當千ノ者
伺公ス自然ノ変アラハ所々ニ火ヲ放シ
其騒動ニ乗テ本城指テ切登ラント思入
タル心中顔面ニ顯レタリ廿七日登城有
テ嫁娶ノ御祝^不丁寧ノ御奔走御暇賜リ洛
ニ入テ權中納言ニ任シ玉ヒ十一月十一
日何変ナク置崎ニ飯リ玉フ上下万民悦
変限ナレ政所モ御喜ヒニテ御飯洛秀吉

一ニ向テ扱モク井伊兵部本多作左衛門ハ
ヲソロシキ者哉我屋形ノ廻リニ薪ヲ積
重子自然ノ変アラハ焼殺サントス今ニ
不忘ト宣ヒケレハ太閤涙ヲ流シ兩人ノ
罪ニハ候ハス我等カ罪也夕々天下ノ為
ナレハ御免被下候ト宣ヒ兵部作左衛
門カ忠義ノ程ヲ感シ玉フ置崎ヨリ御使
トシテ井伊兵部直政上洛ス秀吉公ヨリ

石川伯耆守ヲ以馳走十廿ル、処ニ兵部
終日物不云其後又御茶ヲ賜ルニ伯耆守
ヲ以為相伴直政又一言モ不通是ハ累代
ノ君ヲ背テ秀吉公ニ属シ奉ル不義ト云
七怯弱ト云ヒ武士ノ憎ム処也ト云ニ見
ル者聞者伯耆守カ口ヲ塞ク耻ヲ笑テ兵
部力豪氣アル事ヲ感ス

一同年十二月濱松ヨリ駿府ニ從^徒御^レ玉ヘ

共月追故御家人年ヲ越テ家ヲウツス大
久保忠隣一人從之

一十二月廿八日兼左近衛大將同日為左馬

寮ノ御監

一同十六年四月十四日聚樂行幸ノ供奉シ

一玉フ

一同十七年三月七日家康公洛ニ入玉フ五
月秀忠公ノ母御逝去六月四日秀次公ノ

男子誕生家康公洛ヲ出大坂ニ至リ玉ヲ

一 同十 秀吉小田原奔向之更

一 秀忠卿ハ去ル天正十年ノ比明知ヲ打殺

一 柴田ヲ攻同十三年三月内大臣ニ任シ

同廿一日根来寺ノ凶徒ヲ征伐シ越中國

一 主佐々内藏助ヲ攻ツケ降参シケレハ同

國ノ一部ヲ扶助シ前田利家ニ能登加賀

一 半国前田孫四郎ニ越中ヲ賜リ天正十四

年家康卿ト和睦シ同年九月四國ハ奔向

長曾我部和睦ヲ乞ケレ共信長ノ時不降

更ヲ憤リ兵ヲ発シテ討ニ夕力ハ九列ハ

押渡リ豊前筑前ノ境岩石ノ城ヲ攻テル

ル時ニ家康公ノ使本多豊後守廣孝来リ

合テ共ニ城ヲ攻テ戦合アリ秀吉是ヲ感

シテ金鐔ノ脇差ヲ賜フ嶋津義久ヲ初ト

シテ防キ戦ント催ストイハ共終ニ不叶

降参レケレハ九劔不残治ル上天下ニ誰
有テ不属ト云更ナレ然ル処ニ北條氏直
名代トシテ北條美濃守氏親上洛又トイ
共氏直上洛ナキニ依テ秀吉公遺恨如山
是ニ依テ明王院扱トシテ小田原ニ来リ
家康公ノ御取持ニテ氏政ニ沼田ヲ給ル
ニ於テハ可登ト有付秀吉ノ使富田允近
津田隼人家康公ノ使榊原式部上列ニ趣

キ真田ニハ替地可給ノ由ニテ北條ハ沼
田ヲ渡ス氏政ヨリ石巻下野守ヲ登ラセ
テ禮ヲ謝シケレ共上洛ノ日限駈トナケ
レハ秀吉公以外ノ腹立ニテ富田允近
津田隼人又小田原ハ指下ニ氏直上洛ニ
於テハ家老ノ者共不残引連登ラルヘシ
ト云エ氏直返答ニ関ハ列望ノ旁々ハ誰
ニ不限武勇次第也明王院申サレ、処違

逆セリト云々刺へ天正十七年十一月三日
日謀計ヲ以真田カ奈久留美ノ城ヲ攻取
ル奈久留美ノ城ハ鈴木采女ヲ以守ケル
カ其弟ヲカタラヒ真田カ使ト号シ采女
ヲ上田ノ城へ呼ケレハ采女實ソト思ヒ
急キ罷出一里計来テ今戦国ノ代ニ墨付
ナクシテ弟カ云所信シ難キト思ヒ取テ
返シ城へ入ラントスレハ城中不残弟ニ

与シ城へ不入鉄炮ヲ打掛トツト突フ采
女鞍笠ニ立アカリ城中ヲニラミ腹十文
字ニカキ切ケル家康公此由聞玉ヒ極月
九日洛ニ至リ十日秀吉公ニ謁見シ氏直
カ不爰不及是非ト宣へハ太閤兔角氏直
退治ト仰ケルニ付テ同廿二日駿府ニ飯
リ賜ヒ明十八年正月三日井伊直政御供
ニテ秀忠卿洛上洛ナサレ同十五日秀吉

公ニ謁見シ給フ秀吉公謂直政曰ク家康
卿ハリ千キ成人カナ人質ニ不及幼少成
秀忠ヲ我何ソ留ニ哉從テ国ニ可飯ト宣
ヒ秀忠廿五日駿府ニ飯リ家康公ニ御對
面アリケレハ本多依渡守本多作左衛門
ニ命シテ曰ク秀忠ヲ飯シツルハ秀吉我領
内ノ城々ヲ借ラレ度ヲ欲スト見ヘタリ
通路ノ城々ヲ掃除セヨト仰ラル、処ニ

案ノ如ク三日ヲ經テ後秀吉以書城ヲカ
ラシト欲スサレハコソト宣ヒ諸將ニ軍
令ヲ十三ヶ條下シ玉フ
一 五十五ヶ國ノ諸將ヲ觸ラレ軍勢廿万騎
秀吉公三月十九日洛陽ヲ出廿八日亘列
三嶋ノ府ニ至リ所々巡見シテ沼津ニ飯
テル、
一 小田原ノ義八関八列ノ主ナレハ他國ノ

一 敵ヲ国境ニ城ヲ構テ可防心ハ聊カナケ
レハ伊豆駿河ノ數ヶ城何レモ大軍ヲ引
請ヘキ城ニテアラズ然ルニ依テ不殘掃
捨豆列薙山計ソ殘シケル同國山中ニ新
基ノ城ヲ真シテ松田兵衛大夫城主トス
加勢北條左衛門大夫間宮豊前守朝倉能登
守池田民部山中大炊介推津隼人ヲ指
添氏直ノ御前ニ於太刀或ハ脇指ヲ賜テ

山中ハ手先ノ吏ナレハ各數年ノ武功此
一 拳ニアリト云ハ何レモ思々ニ御請致
シ罷立タレハ滿座嘯ト感シ出ス朝倉ハ
是ニ反シテ廣間ニ出日比親キ者ニ向テ
北条ノ家滅爰ニ極リ又命ハ義ニ依テ輕
ク又吏ニ依テ重キ物ナレハ我等ハ左衛
門太夫討死ヲ遂ナハ^共其ニ相順フヘシ近
年ノ御政道正理ニ違フ吏多ク普代ノ侍

衆述懐イタシフシクナレ共御父子曾テ
御存ニナクテ打過玉ノ程ニハカクシキ
吏ハ有ニシキソ御出頭衆御取成ヲ以日
比御用ニモ可立卜思召サレ人々主君
ノ目金ヲ違へ給フナト云^散教シ別ニケリ
一伊豆ノ薤山ノ城ニハ北條美濃守氏親同
国下田ノ城ニハ清水上野介上野忝枝ノ
城ニハ大道寺駿河守武列鉢形ノ城ニハ

北条安房守氏國楯籠儿関八列ノ城々大
胡小幡伊勢崎新田^金加野那和前橋安中
小泉箕輪木部白井兔取館野立林佐野足
利壬生皆川藤世加沼小山榎本深谷忍川
越松山木栖葛蒲岩付羽丹生江戸津久居
八王寺耳繩新井三島高野臺鳥手関宿小
金布川米本助崎^吾孫子^幡印^幡佐倉白井推津窪
田万崎長南池和田東金大湏賀八幡山東

野山室岩ヶ崎古河土気成戸小久保土浦
相馬本堀江戸崎栗橋笈水此外小城其数
ヲ不知小田原ノ城ニ楯籠ル

一 同廿九日秀次公山中ノ城ヲ攻テ攻テ
処ニ中林式部少輔一族等出丸ノ勢ヲ追
入其競ヒテ以本丸ヲ乘取城主松田加勢
ノ間宮武勇ヲ不属^所戦死ス家康公先手ニ命
シテ箱根ノ道ヲ遮テ山中ヨリ小田原へ

一 引入ル敵ヲウタシム渡边勘兵衛出丸ノ
先乗ニテ太閤ノ御感ニ預ル

一 四月朔日薙山ノ城主北条美濃守堅固ニ
守テ扱ノ後用キ渡ス

一 同日諸軍勢小田原へ押寄ル家康公ハ
一 色濱手ヲ請取テ榊原大久保酒井井伊
忝平周防守牧野右馬允陣シテ備へタリ

一八日ノ度皆川山城守小田原ノ城ヲ出テ
家康公ヲ頼テ降ス

一廿六日浅野長政石田三成大將トシテ伊

達正宗佐竹義宣関東ノ城々請取ケル

一五月家康公ノ家臣平岩七之助鳥居彦右

衛門本多中務酒井左衛門大久保七郎右

衛門大將トシテ東金廳南岩付下妻筑井

其外城々一押寄請取ケル

一前田利家上枚景勝ハ信列筋ノ大將トシ

テ道々ノ城々請取押来ル

一六月十六日松田尾張守其子笠原新六郎

太閤ハ密通ニ城中一兵ヲ引入ントテ其

叛逆顯レ忝田父子誅セラレ

一同十八日下総国白井ノ城ヲ家康ノ家臣

榑原式部太輔攻テ是ヲ降ス処ニ酒井左

衛門是ヲ得テ守ル

一廿二日井伊直政忝平周防守小田原篠田
輪ヲ責取同日利家景勝八王寺ノ城攻落
一秀吉諸將ニ命シテ一時ニ火銃ヲ祭シテ
小田原ノ城兵ヲ劫ス
一七月五日氏直私ニ城ヲ出テ羽柴下総守
ヲ頼テ謝ス
一六日家康公ヨリ榑原康政井伊直政本多
忠勝等ヲ以小田原ノ城ヲ請取十日家康

公小田原ノ城ニ入玉フ
一十一日相摸守氏政陸奥守氏昭自殺ス十
二日氏直高野山ニ入并安房守美濃守佐
右衛門佐ヲ命助リ高野ニ供奉ス
一十二日秀吉公小田原ノ城ニ入テ諸將ニ
關國ヲ頒テ賜フ先家康公ニ關八万并安
房上総ハ幕下ニ付テハ、江列九万石石
部関ノ地藏四ヶ市場米野関白瀬賀中泉

清見寺各一千石嶋田二千石又領之元ノ
五个国ヲ上ル

一十二月廿八日蒲生氏卿攻屠妙城而悉ク

一殺賊徒

一天正十九年正月五日秀吉公今度ノ次而

二奥列ヲ制シ飯洛黒川迄御着陣シ玉ハ

一八関ハ易ハ云ニ不及出羽奥易ノ輩迄日
時ヲ不移馳来平伏シ降参シケレハ帳面

頭本領安堵仕罷飯ル遲参ノ輩帳面ニテ

一ラナルハ其時領地離レケル是ヨリ秀吉

公ハ御帰洛同十四日秀次武列府中至ル

一三月三日家康公洛ヲ出テ廿一日江戸ニ

御着

一六月廿七日伊達正宗宮崎ノ城主宮崎民

部ヲ攻落ス

一七月十九日家康公奥易賊徒ヲ誅セント

一 一テ岩付ニ居シ玉フ九月七日九ノ部ノ
城主力屈シテ淺野長政ヲ頼テ和ヲ乞ト
イハ共殘兵堅ク是ヲ守ル蒲生氏卿井伊
直政等急ニ攻テ城ヲ拔ク十月廿七日家
康公岩手沢ニ有テ九ノ部ノ落城ヲ聞テ
古河ニ飯リ廿九日江戸ニ歸城
一 秀忠卿京都ニ於テ任參議兼右近衛權中
將十二月十七日洛ヨリ江戸ニ飯玉フ

朝鮮陣之吏

一 天正廿年改元有テ文祿元年卜成二月ニ
日秀吉公朝鮮國ヲ征伐セシ卜欲ニ依テ
家康公江戸出馬十六日洛ニ入玉フ十九
日下野守忠吉恩ノ城主トナル
一 三月一日先陣小西撫津守加藤主計頭黑
田甲斐守洛ヲ出テ朝鮮國ニ趣
一 十七日家康公兵ヲ帥テ京都ヲ出馬伊達

- 一 正宗上秋景勝佐竹義宣南部等從之
- 一 廿六日秀吉公軍ヲ発シテ帝都ヲ出ル
- 一 四月十二日小西朝輝ニ至リ金山海ノ城ヲ圍ム廿九日金山海ノ兵城ヲ出テ奔ル
- 一 二万余人討テ其城ヲトル加藤黑田金山海昌原ノ城ヲ拔ク五月十日日本ノ兵王城ニ入テ朝鮮王ノ北ルヲ追テ王子ヲ捕フ
- 一 薩列土海北宮内左衛門郷民ヲ催シ乱ヲ

- ナレ佐敷ノ城ヲ拔秀吉公淺野幸長家康公ノ家臣本多忠勝ニ命シテ是ヲ討シム
- 一 廿二日秀吉ノ母公病ニ依テ洛ニ還御廿五日逝去ノ後晦日秀吉公洛ニ入玉ヒ亦名護屋ニ趣キ玉フ
- 一 九月十五日秀忠洛ニ飯リ任權中納言叙從二位十月六日江戸ニ下リ玉フ
- 一 文祿二年正月六日大明ヨリ加勢来テ日

一 本ノ兵一旦敗績ストイハ共所々ノ城々
一 攻落シ先鋒ニサハル敵ナケレハ大明國
一 一押渡ラント欲ヌ朝鮮國不叶和ヲ乞ニ
一 依テ暫ク兵ヲ治メテ名護屋ヲ窺
一 八月三日秀頼誕生ヲ聞テ名護屋ヲ出テ
一 洛ニ趣キ還御
一 十月十四日家康公洛ヲ出テ廿六日江戸
ニ御参着

一文祿三年二月廿七日秀吉公ト家康公ト
一 諸大名和列吉野山ノ花見アリ
一 同四年三月廿八日秀吉公車ニ駕シテ家
一 康公ノ芦屋ニ入御饗應美尽シ善尽セリ
一 同五月三日家康公洛ヲ出テ江城ニ飯リ
一 玉ハ又七月十四日自洛書ヲ以秀次卿
一 逆謀ヲ討ントス然ルニ依テ馬ヲ馳テ三
一 島ニ至ル処ニ秀次生害ノ告アリ廿四日

伏見ニ入テ秀吉公ニ謁見シ玉一八秀吉
公悦テ秀次ノ逆謀ノ変ヲ談シ玉フ
一九月十七日淺井長政ノ娘ヲ秀吉ノ子ト
シテ秀忠公ニ輿入
一慶長元年五月八日家康公任内大臣叙ニ
位十一日参内ス
一十三日秀吉及秀頼駕車テ参内家康公駕
車入朝隨身四人扈從永井直勝内藤安成

豊嶋正次

一同八月十八日大明ノ使和泉堺ノ浦ニ至
リ廿九日伏見ニ来ル九月朔日秀吉大明
ノ冊使ニ面夕リ朝鮮ノ王子不令来謝変
ヲ怒テ又日本ノ兵ヲ殺シテ所々ノ城ヲ
責落ス
一同二年正月下旬ヨリ伏見ノ城普請有リ
諸人困窮ス

一同三年二月羽柴藤三郎秀行會津百万石
ヲ被召放十九万石ニテ宇津宮へ国替仰付
テル、其咎ハ去年父飛騨守氏卿死去
藤三郎幼少ナレハ家臣奢リニ長シ依怙
具員ノ裁判多クハ国家人民騒動ニ剩
ハ威勢ヲ争ヒ家臣蒲生四郎兵衛綿理ハ
右衛門喧嘩シテ家中ニ二分レ何トヲサ
ムレトモ和合シカタキニ依テ也蒲生四

郎兵衛ハ加賀ノ利家へ掛入一命助ケテ
レ兩國へ逐電ス

- 一上枚景勝會津百万石堀久太郎村上周防
守ニ越後ノ國ヲ賜フ
- 一三月十五日醍醐ノ花見善尽シ美尽セリ
- 一六月二日ヨリ秀吉公御不例腰不立八月
十日將軍塚鳴動ス諸人只更ニアラスト
騒ク処ニ又何者共ナク内府ハ當正月神

夢ノ告ニ依テ石清水一詣玉ヲ又其夜江

戸ニ於テ朱津清右衛門ト云者ノ妻ノ夢

想ニ二日ヨリ衣古公所來不遠入其

都ナル盛ノ花ハ散果テアツテ人松ノ

ヨシハツキヌル

ト夢ニ見タルト云出シ人々希代ノ変也

トトリサタシケル

松下本當代記三本七卷類本又有八卷者今以此
二部校正畢

松下本卷尾載

此一書者或官家之秘本而 御當家之基

本詳記尤實錄成者也乎吾數年懇望而繕寫

之以為家藏秘中之秘也至於天正之末人皆

所知故不勞尅筆而已

萬治庚子孟夏上浣

松下環翠軒在判

今按此本於三部中卷帙最多故本彼存此環翠軒

稱長左衛門蓋當時以系圖家稱

八卷本第一卷首収畧系其圖尤疎然間當商
議者兩三事抄出列于左

新田有親長阿弥後小松御時

新氏應永元四月二十日卒

恭親貞治二生永享八九月二十三日卒祐金大禪

定門

信光 應永十七年誕生長享二七月二十日卒

文政 五月庚子



内山温恭

中村時萬

村井量令

櫻井壽胤

中尾忠貞

下山近友

